

巻 頭 言

臨床心理学部 学部長 濱野 清志

今年も心理社会的支援研究を無事刊行することができた。論文2本と研究ノート1本と資料1本、報告2本、教育、保育、福祉にまたがった、本研究誌にふさわしい研究が出そろったものだと思う。

さて、最近とても興味深い体験をした。そのことを振りかえって、巻頭言としたい。

大学院の実習先にご挨拶にうかがった帰りのことだ。その日は前の夜からぐっと冷え込み、また、少し低気圧であったので、朝起きるとすでに京都の山々はほどよい雪化粧になっていた。そんな日であったので、実習先の京都の北の、岩倉実相院の近くの病院に到着したときも、いまにもまた雪の降りだしそうな天気であった。

実際、挨拶を終えて帰るころになると、かなり激しく雪が降りはじめたところなのであった。まったくの粉雪というのだろう。固くひきしまった雪の小さな粒は、身体にあたって融けることなくはじけて転がる。北の山を上がったところだから、きっと寒いのだろう。同じ京都でも、ずいぶんと違う、そう思ったのである。

それから雪のなか、叡電の岩倉駅までくだり、さらに同志社高校の横を通り抜けて国際会館の駅まで出ていった。実相院近くの岩倉具視別邸跡から小川をくだって山住神社にいたり、岩倉の街中に出たあたりから雪質が変わっていくのがわかった。固くひきしまった粉雪はもはやほとんどなくなり、粉雪のつぼみが少し開いたぐらいの緩んだ雪になっていったのである。冷えた山の自然の中から街場に出てきたからなのだろう。そう自然に考えて歩いた。

そしてさらに歩いて同志社高校あたりに来ると雪は本格的な牡丹雪と変わっていた。大きなふわふわした雪は身体にあたると転がることなくそこに残り、融けやすくなる。粉雪、少しほどけた雪、牡丹雪への変化がきわめて明瞭で、頭の中では岩倉の実相院あたりの山の中腹から、だんだんと下におりてきた岩倉の街中、さらに南下して高校のあたりと天気図の等圧線のようにそのときの高さや寒さに応じた雪質の変化を想像する自分がいたのである。

国際会館の駅に着くころにはすっかりとやんでしまった雪を振りかえり、ふとこれは考えるとどこか変な推論であることに気づいた。私は私の歩いた時間を無視して、すべての雪の変化が時間を超えてあるということを前提としていることに気づいたのである。だんだんと雪質が変化したのは、場所の移動からではなく、時間的な推移そのものであったのかもしれない。私が高校の近くでみた牡丹雪は岩倉の山の中腹でも同時に降りはじめていたのかもしれないのだ。観察する主体はいつも観察する対象とは切り離れた位置に自分を置いてみるという偏りがある。このことを無視してさまざまに推論することは、人間科学にとっては致命的な欠陥を生んでしまう。私抜きに抽象的空間論ではなく、私の生きた時間を考慮に入れた生きた世界の描写、これがとりわけ私たち心理社会的支援の研究の前提ではないか。そんなことを考えたのであった。

